

# 保育日誌を活用した看護師、病棟保育士間の申し送りの効果

キーワード：チーム医療 情報共有 コミュニケーションツール

1 病棟 5 階東

河井紗衣子 阿部久美 小川貴代 西村佳代子 田中有貴

高原彩乃 松尾成美 末重千里

## I. はじめに

B 病棟には現在 2 名の病棟保育士(以下、保育士とする)が勤務しており、平日の 10 時～18 時半までの患児への遊びの援助、家族不在時の保育や家族への精神的ケア、看護師、院内学級教員と協力しての病棟年間行事の実施等を行っている。以前より、看護師保育士間でコミュニケーションはとってきたが、定期的な情報共有の場は設けていなかった。また、看護師は、B 病棟で使用している看護師保育士のコミュニケーションツールである保育日誌にも十分に目を通せず、保育士からの情報を元にカンファレンスを行うこともほとんどないのが現状であった。

そこで、情報共有の場として、看護師と保育士との申し送り(以下、申し送りとする)を開始した。しかし、申し送りが看護師から保育士への一方的なものとなっていると感じたため、申し送りを双方向の情報共有の場とするために、保育日誌を活用した申し送りを開始した。今回、看護師と保育士との申し送りの現状を把握し、保育日誌を活用する前後で、看護師、保育士の申し送りに対する意識についてアンケート調査を行い、比較検討した結果を報告する。

## II. 方法

### 1. 対象

A 病院 B 病棟看護師 25 名(看護師長は除く)

A 病院 B 病棟保育士 2 名

### 2. 調査期間：平成 23 年 4 月～10 月

### 3. 方法

1) 定期的な申し送りの開始(平成 23 年 4 月～6 月)。

(1) 当日のフロアマネージャーと保育士で申し送りを行う。

(2) A 病院 B 病棟看護師、保育士へ、申し送りについてアンケート調査を行う。

2) 申し送りのマニュアルを作成(表 1)し、保育日誌を活用した申し送りを開始する(平成 23 年 7 月～9 月)。

3) 再度 A 病院 B 病棟看護師、保育士へ、申し送りについてアンケート調査を行う。

4) 回収したデータを集計し、分析する。

表 1. 保育日誌を活用した申し送り

(1) 可能であれば、申し送りまでに前日までの保育日誌に目を通す。
(2) フロアマネージャーからの情報提供後に、保育士から保育日誌を使い、申し送りを実施する。
(3) フロアマネージャーは保育士からの情報で共有が必要と思われる内容を看護記録(SOAP画面)に記載し、掲示板へは『保育士より情報あり』と記載する。
(4) 至急を要する保育士からの情報に関しては、日々のチームリーダーに伝える。
(5) 日々のチームリーダーを中心に、保育士の情報と看護師の情報とを合わせて必要に応じて、カンファレンスを行う。
(6) カンファレンスで対応策が出た場合には、日々の担当看護師が保育士への伝達、情報共有を行う。

#### 4. 倫理的配慮

質問紙は無記名とし、質問紙の回収をもって研究参加への同意を確認した。

### III. 結果および考察

アンケートの回収率は、申し送りで保育日誌を活用する前の期間(以後、前とする)は 22/25 名 (88.0%)、後の期間(以後、後とする)は 21/24 名 (87.5%)であった。

#### 1. 双方向のコミュニケーションのツールとしての保育日誌に対する意識の変化

「看護師と保育士がおのおのの専門性を認識し、看護師は医療の視点から、保育士は生活の視点からお互いの情報を共有し、子どもの援助や家族の支援にあたることが重要である。」と渡部ら<sup>1)</sup>は述べているように、患児やその家族がより良い入院生活を送るためには、保育士の役割が重要である。また、看護師が知らない患児や家族の姿が記載されている保育日誌を介して保育士と情報を共有し、連携をはかることが大切なことであると考えられる。申し送りを開始し、保育日誌を活用するように呼びかけたことにより、保育日誌を読むようになった看護師は 12 名 (54.5%)から 20 名 (95.2%)と増加した(図 1)。保育士から、「プレイルームや看護師不在時の患児、家族の様子」、「保育士の関わり方」等の情報を得て介入した結果、保育日誌の内容を日々の看護に活かしているとした看護師も 10 名 (52.6%)から 14 名 (66.7%)と増加した(図 2)。逆に日々の看護に活かしていない看護師は、前では 9 名 (47.4%)であり、後では 7 名 (33.3%)であり、減少は若干であったが、その内容は、単に「保育日誌を読んでいない」という理由から、保育日誌を読む必要性を個人が認識しながらも「十分に読めない」、「読めても活用するスキルが不足している」と変化した。

このことから、保育日誌が看護師にとって重要な情報源であり、保育士とのコミュニケーションツールとして効果的な役割を果たしていると再認識できた。その反面、保育日誌を十分に読めないという意見があったことから、保育日誌の見直しが示唆された。これは、保育日誌が個として存在していることが原因と考えられ、電子カルテへの取り込みが必要と考える。また、保育日誌を電子カルテに取り込むには、現在の形式では不十分であると考えるため、保育日誌のフォーマットの変更が必要である。

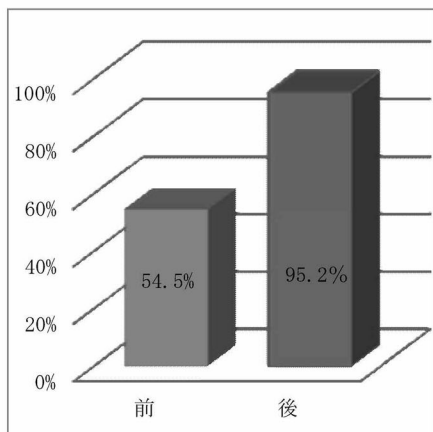


図 1. 保育日記に目を通している

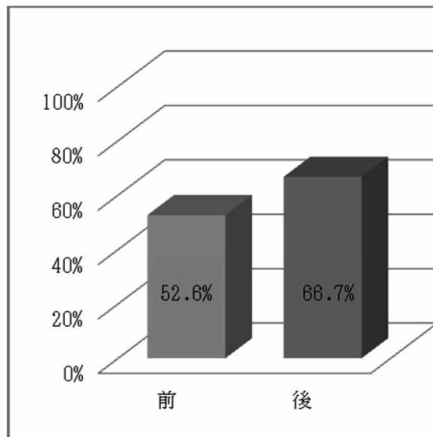


図 2. 保育日記の内容を日々の看護に活かしている

## 2. 双方向のコミュニケーションの場としての申し送りに対する意識の変化

保育士が求めている情報を提供できている看護師が、5/10名(50.0%)から6/10名(60.0%)となり(図 3)、その内容は、前では「保育士が聞きたいことや質問したことに対して」であり、後では「患児の病状やそれに対する対応について」、「患児の安静度や ADL の状況」、「感染とその対応策」であった。できていない内容と理由は、前では「自分が担当したことのない患児のこと」、「チームが違う患児の情報が分からないので、上手く情報提供できていない」、「疾患が幅広く、すべては情報提供できていない」、「保育士が求めている情報が分からない」であった。後では、「保育士が求めている情報を把握できていないこともある」、「保育士から得た情報で看護師が関わっていることや保育士に継続してみたいことが十分に情報提供できていない」、「カンファレンス等を行っても、保育士にその結果が伝達できていない」、「チームが異なる患児の場合、知らない情報が多く、情報提供が難しい」であった。また、申し送りで困ることがある看護師は、7/11名(63.6%)から3/10名(30.0%)と減少した(図 4)。その内容は、前では「チームが違うと詳しい情報が分からない」、「情報が不十分で申し送れないことがある」、「保育士がどのような情報を必要としているのか、どこまで説明したら良いのかが分からない」であり、後では「チームが違うと詳しい情報が分からない」、「申し送る内容が分からない」であった。

このことから、保育日記を活用した申し送りを行うことで、求められている情報を知ることができ、具体的な情報提供ができるようになった。そして、看護師保育士互いの視点が統合することにより、両者が幅広い視点で継続した関わりを行い、申し送りの場が互いの情報共有の場と変化し、回数を重ねることで、双方の意見交換が円滑に行えるようになった。このことから、申し送りが看護実践に活かすための必要な場と意識できるようになったと言える。しかし、B 病棟では感染非感染でチームが分かれており、日々互いの情報を共有し合うには限界があるため、他チームのことで分からないことがあれば、その都度担当看護師やチームリーダーに確認していくことも必要であると考えられる。

また、申し送りで困ることがある保育士は、前では「なし」であったが、後では、「申し送りの内容をもう1人に伝えることが業務上できない時がある」と回答している。これは、申し送りが習慣化してくることで、共有する必要がある情報が増え、保育士同士が申し送りの必要性をより意識した結果である。よって、今後、保育士同士が申し送りを行う時間の確保が必要であるが、そのためには、保育士の現在の勤務時間や2人の勤務体制の見直しも考慮すべきである。

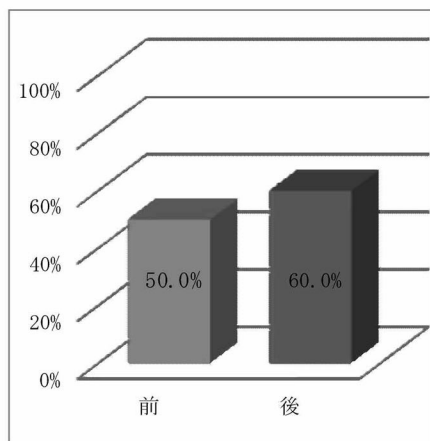


図 3. 保育士が求めている情報提供が  
できている

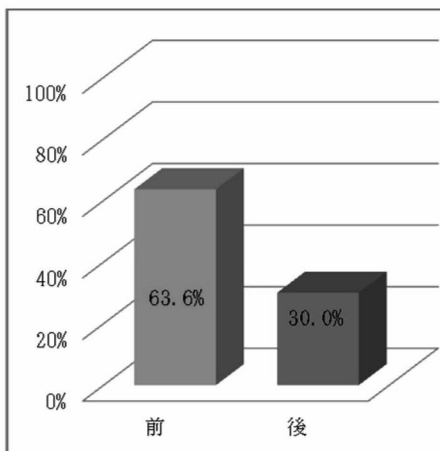


図 4. 申し送りで困ることがある

### 3. より良い介入を提供するためのチーム医療としての申し送りや保育士に対する意識の変化

申し送りの内容を日々の看護に活かしているとした看護師が、4/9名(44.4%)から9/10名(90.0%)と大幅に増加し(図 5)、その理由として、前では、「感染面では看護に活かしている」、「患児の日々の過ごし方等が分かり、患児、家族への声掛けや対応の仕方が分かる」であった。後では、「看護師が気が付かなかった患児や家族の様子や、保育士が観察した情報が分かる」、「申し送りの内容を看護記録に残すことで看護師全体に共有できる」、「看護の中で保育やしつけの視点を持つことができる」、「問題に早急に介入することができる」、「保育士に質問されたことで指示等を再確認し、ケアの統一に繋がる」、「感染非感染での注意事項を再確認でき、感染予防策が徹底できる」であった。この結果から、看護師が知らなかった情報や気が付かなかった視点での問題提起により、ケアの統一や問題への早急な介入等に活かせることが分かった。申し送りの内容を日々の看護に活かしていない理由としては、前では「看護師から保育士へ一方的に送られていることが多い」、「申し送り合うのみで、カンファレンスに繋がらない」、「チームが違くと深く関われない」であった。しかし、後では「保育士からの情報を看護記録には残しているが、その後の看護展開が不十分である」、「話し合いになるような申し送りを受けることがなかった」と変化した。また、申し送りの内容を日々の保育に活かしていると両保育士とも回答し(図 6)、その内容は、前では「申し送りをするすることで病棟全体の状況を知ることができる」、「症状に対する

対応」、「プレイルーム使用の可否や感染の情報から、事前の対応や声掛けの際に言葉を選ぶことができる」であった。しかし、後では、「申し送りを聞くことで違った視点で見ることができる」、「情報をもらうことで意識して観察でき、関わった内容について保育日誌を活用して伝えることができる」、「活動制限が分かることで遊びの提供方法を選択できる」と変化した。この結果から、感染面等の一般的な把握だけではなく、個々の病気に対する知識や情報を知り、共有することで、患児を保育する特別な環境での介入に活かせることが分かった。

申し送りで双方の情報をリアルタイムに知ることで、より患児の状況に沿った関わりを行えるようになった。また、申し送りがコミュニケーションの場として機能し始め、看護師が保育士をチームの一員として、より意識し始めた結果、申し送り内容が具体的なものに変化し、保育士もより質問をしやすくなり、互いに円滑なフィードバックを行えるようになった。このことから、保育日誌を活用した申し送りを行うことが、チーム医療としての意識の向上に繋がったと考える。今後、双方の情報をリアルタイムに知る方法として、保育士の電子カルテ閲覧の権限の拡大も検討していく必要がある。

保育日誌を活用した申し送りを行った期間中、保育士からの情報で共有が必要と判断したものは4件であったが、その情報から、カンファレンスを行った記載はなかった。実際に、カンファレンスを行ったかどうかは定かではないが、「看護師、保育士、CLS(チャイルド・ライフ・スペシャリスト)がそれぞれの立場から子どもや家族にかかわることで、さまざまな情報が集積された。その情報を子どもや家族への実際のケアに生かしていくためには、職種間での情報の共有が必須となる。カンファレンスの活用、カルテへの記載、日々の職種間でのコミュニケーションが、主な情報共有の方法となる。」と小原ら<sup>2)</sup>が述べているように、行ったカンファレンス内容を看護記録に記載し、保育士と共有しなければ、情報提供したとはいえないと考える。今後は、看護師のチーム間の情報共有や積極的にカンファレンスを行い、その結果を看護記録へ残すことに意識的に取り組む必要がある。

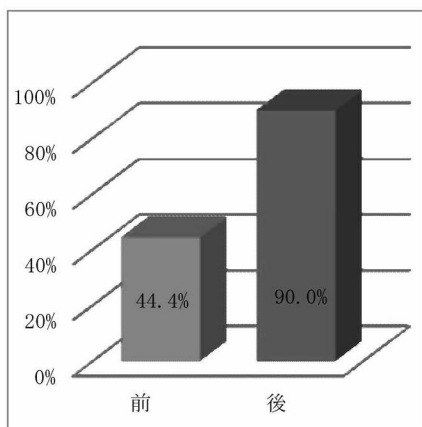


図 5. 申し送りの内容を日々の看護に活かしている

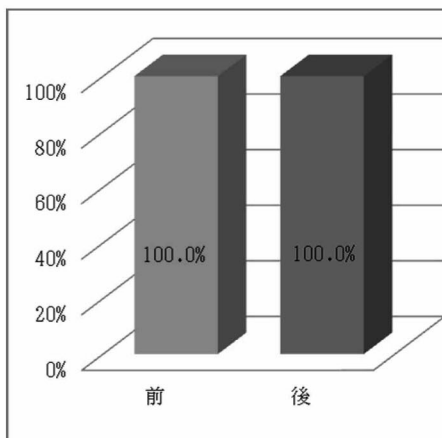


図 6. 申し送りの内容を日々の保育に活かしている

#### IV. 結論

保育日誌を活用した申し送りを行うことで、双方向のコミュニケーションツールとしての保育日誌に対する意識、双方向のコミュニケーションの場としての申し送りに対する意識、より良い介入を提供するためのチーム医療としての申し送りや保育士に対する意識が変化、向上した。

#### 引用文献

- 1) 渡部和子, 田代弘子: 保育士導入・連携による効果と課題, 小児看護, 32(8), 1059～1063, 2009
- 2) 小原雅子, 伊藤直子, 原田香奈: 看護師と保育士, チャイルド・ライフ・スペシャリストとの協働, 小児看護, 32(8), 1096～1101, 2009

#### 参考文献

- 岩鼻かなみ, 三村かよ子, 岩田友美ら他: 保育日誌を活用した看護ケアの提供, 山口大学医学部附属病院看護部研究論文集, 84, 53～57, 2008
- 飯村直子, 江本リナ, 川口千鶴ら他: 医療施設における看護師と保育士の連携の実態, 日本小児看護学会誌, 17, 66～72, 2008
- 金城やす子, 松平千佳: 医療保育士からみた看護師との連携の現状と課題, 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 18, 35～43, 2004
- 山北奈央子, 浅野みどり: 子どもを尊重した看護師と医療保育士のよりよい協働に向けてー医療保育士の専門性に関する両者の認識に焦点をあててー, 日本看護医療学会雑誌, 12, 72, 2010